

おおけいけだ
大毛池田遺跡

調査の経過 大毛池田遺跡は、一宮市北西部から葉栗郡木曾川町北東部にかけて所在し、木曾川により形成された標高9 m前後の自然堤防及び後背湿地上に展開している。東海北陸自動車道建設に先立ち、平成5年～7年にかけて発掘調査が行われ、古墳時代から戦国期に及ぶ複合遺跡であることが確認されている。今年度は県道萩原三条北方線の建設に伴う事前調査であり、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じた委託事業として、400㎡の発掘調査を行った。(浅井 厚視)

調査の概要 今年度調査で確認された遺構・遺物についての時期区分については、昨年度までの調査成果を踏襲し、A期(古墳時代)、B期(飛鳥～平安時代)、C期(鎌倉時代～室町時代)、D期(戦国期)とする。

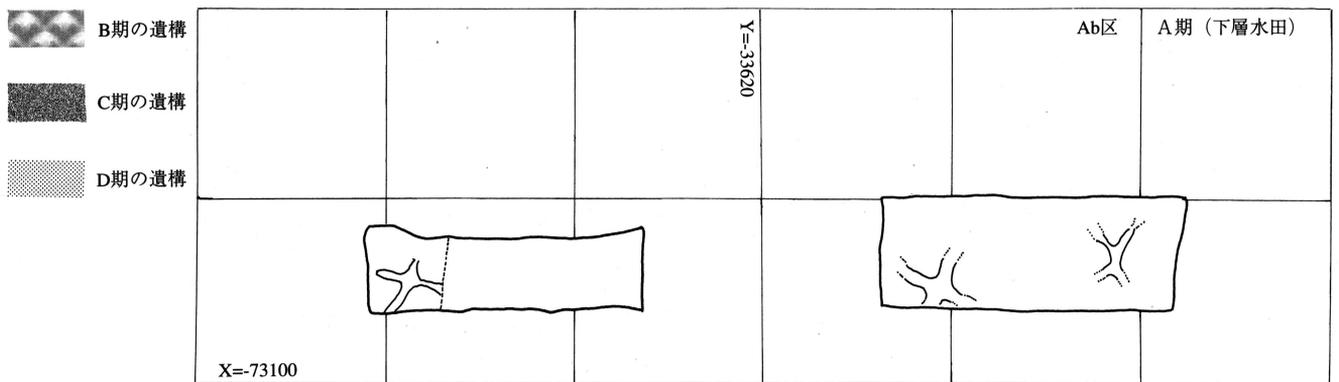
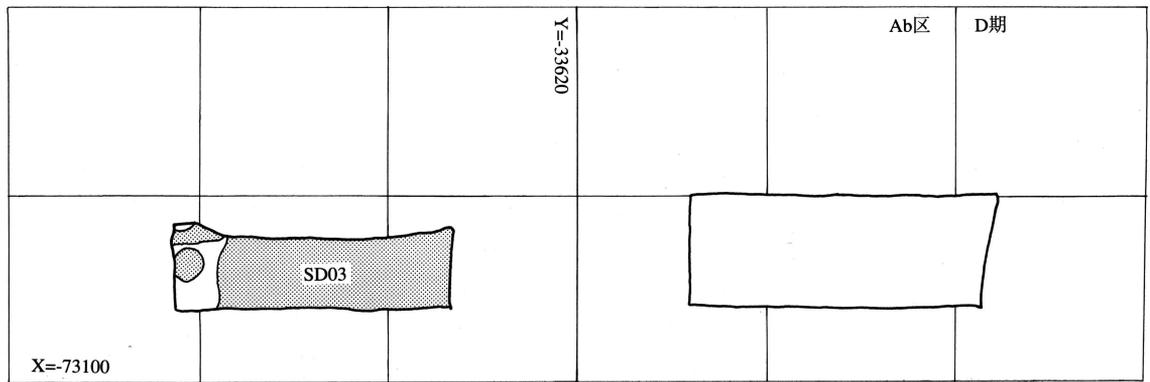
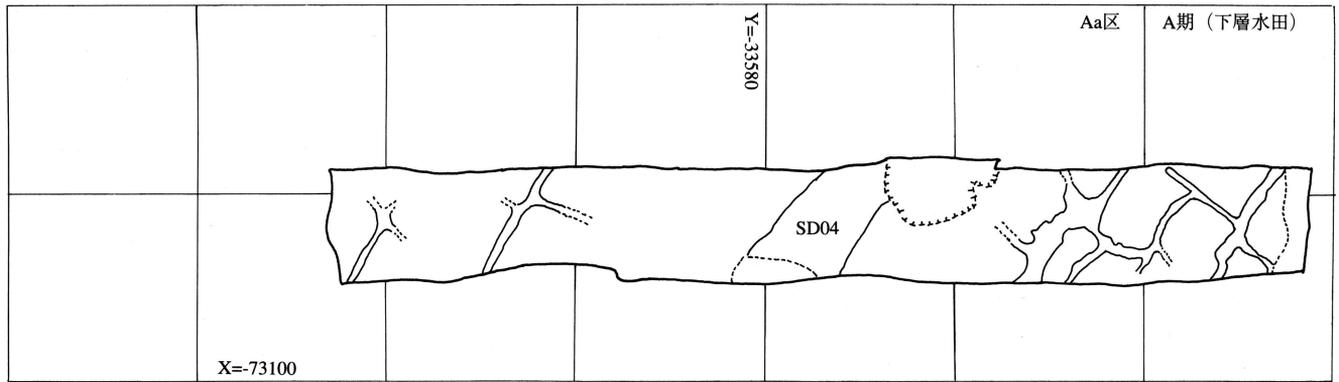
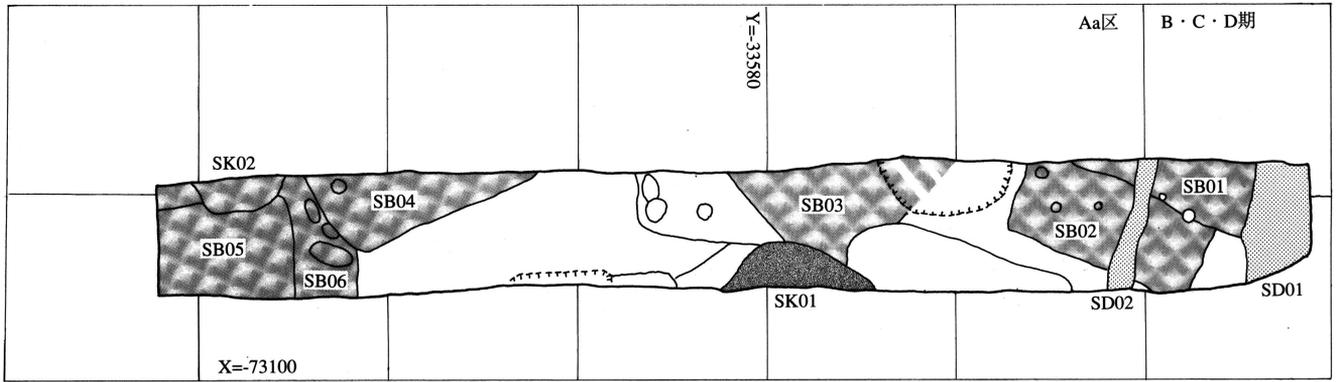
A 期 古墳時代前期水田跡は、黒色粘土層を基盤とする「下層水田」と、この層の上層の灰色粘土層に形成された「上層水田」の2つの水田が、調査区全体に展開していた。しかしこれらの水田の畦畔による区画は部分的に検出できたとどまった。またA a区では、SD04の下層からさらに溝1条を検出した。この溝からは弥生時代中期末頃に属すると思われる甕などが出土した。大毛池田遺跡で弥生時代まで遡る遺構が検出されたのは、本年度の調査が初めてである。なお「SD04下層」溝と下層水田基盤層との間には、洪水性の堆積によるとみられる粗粒砂層があることが観察できた。このことから、この付近に水田が造営される直前に比較的大規模な土地環境の変化(洪水か?)があったと思われる。

B 期 SB01～06は、いずれも平安時代前期の竪穴住居である。このことにより93A区で見られた平安時代の居住域が、さらに西へと展開していたと考えられる。またSK02もこれらとほぼ同時期の土坑である。検出した竪穴住居には、2つの方向性が見られるが、それが位置関係による違いなのか時期による違いなのかは、今後考えていかねばならない。やや不整形なプランを呈したSK02は、埋土中に焼土や炭化物が濃密にみられたことや、土師器甕も出土していることから竈の可能性もある。

C 期 A a区のSK01のみである。検出した規模から、室町時代後期(14C後期)の井戸と思われる。

D 期 Ab-1区で95E区から延びるSD03を検出した。この溝は、少なくとも16世紀代にさかのぼり、この付近の地境を示していたと考えられる溝である。A a区で検出したSD01・02は、ほぼ南北に並行していることから、何らかの企画性が考えられる。

まとめ 様相は不明であるが、大毛池田遺跡で遺構が展開し始めるのは、弥生時代中期末頃からのようである。そして弥生時代後期から古墳時代前期初頭の間に、土地環境が変化したことにより水田耕作地へと移り変わっていったと考えられる。平安時代には、この付近にある程度の規模をもった集落が展開していたと考えられる。戦国時代の頃には、SD03のような地境の役割を担っていたと思われる大溝が掘られていた。(飴谷 一)



第1図 96A区遺構配置図 (1:200)